

れた多くの資料を丹念にあたり、木曾三川の改修工事に果たしたデレークの役割に着目している。第二章の「水屋・水塚・段蔵——日本各地の防水建築——」は、減災の知恵というべき施設が、現在でも多く残っていることを示している。これらの建築物は減少しつつあるが、記念碑的に残すだけでなく、防災・教育面などで積極的な利用に結び付ける検討は今後ますます必要になろう。第三章は、輪中地域の洪水の背景にある平野や河道変遷をとらえた「濃尾平野の形成と河道変遷」である。旧河道などの微地形の重要性に触れるなど、防災との関係を指摘している。第四章は、「輪中地域の外水災害とその住民対応——大垣輪中を中心に——」で、作為的な破堤を考察している。明治29年の洪水の際、輪中に入った水を排除するための作為的な破堤（乙濇）について、新しく見つかった資料などから再検討したものである。第五章は、悪水をめぐる高位部と低位部の対立を扱った、「悪水をめぐる対立と慣行」である。輪中地域では、水はけの悪い水田のたまり水を悪水というが、これをめぐる地域的な対立や取決めは、まさに治水思想が如実にあらわれたものでもある。第六章は「輪中と悪水湛水」で、前章で取り上げた悪水湛水による内水氾濫を防ぐために設けられた「堀田」を扱ったものである。最後の第七章は、「輪中を支えた水防意識」で、輪中地域には強固な水防意識が存在することを指摘している。それは強固な水防組織によって支えられてきたが、第一部第四章でも触れているように、洪水被害の経験のない住民の増加などによって、地域の水防意識が大きく変質する危険性を常にはらんでいるのである。このように第二部の各章は、洪水と人間の相克の歴史をとらえるに際して、ジグソーパズルの各パーツのように、第一部と共に治水思想の全体像を形成しているのである。

ところで、前書の最も特徴的な点は、近世や近代における治水思想を明確に示し、それは大きな洪水をきっかけに再認識されることを明らかにしているところにある。これに対して本書の特徴の一つは、1995年における意識調査の結果を加えているために、前書との時期的な対比ができることである。1976年9月12日の洪水（九・一二災害）を受けて、輪中地域では一時的に水防意識の高まりをみせたが、その後再びそれが徐々に低下しているという。しかし、前述のように大きな環境変化が起こっている現在、

これまでにない豪雨がもたらされれば、洪水が起こり得ることは、2000年9月の東海豪雨災害をみるまでもない。そのような洪水が起これば、再び水防意識が高まることは疑いがない。

本書はそのタイトル、『洪水と人間——その相克の歴史——』にあるように、時代とともに「治水思想」が変わりつつあることを明快に明らかにした。研究者だけでなく、行政に関わる人々、特に洪水の危険性がある地域に住む人々には、是非一読してその変化を知っていただきたいと願う。

著者の輪中研究は、本書の刊行で一区切りをつけたというものの、終了したわけではない。著者はこれまで多くの機会をとらえて啓発的な活動をしてきたが、今後も研究とともに「研究者」—「行政」—「地域住民」との橋渡し役を果たすことも重要な役割であると考え、著者だからこそ可能になるそのような役割を、今後とも果たしていただくことを切に願っている。

文 献

伊藤安男 1994.『治水思想の風土——近世から現代へ』古今書院。

伊藤安男 2009.『台風と高潮災害——伊勢湾台風』古今書院。

(吉越昭久)

平岡昭利編：離島に吹くあたらしい風、海青社、2009年、111 p., 1,667 円。

本書はこれまで「離島研究」や「地図で読む百年」などのシリーズを編んできた平岡昭利氏による新しい本である。本書の内容は2007年10月の日本地理学会の公開シンポジウムでの研究報告を一般向けに仕立てたもので、七つの離島が取り上げられている。構成は以下の通りである。1章：インバウンド観光に揺れる「国境の島」（長崎県対馬） 2章：クリスタン・ツーリズムが展開する島々（長崎県五島列島） 3章：グリーン・ツーリズムの導入を模索する島（新潟県粟島） 4章：ブルー・ツーリズムの定着をはかる島々（長崎県壱岐島・青島） 5章：エコツーリズムの展開と住民評価（沖縄県西表島） 6章：エミュー牧場を経営する漁業の島（山口県蓋井島） 7章：Iターン者が急増する南国の島（沖縄県石垣島）

なお、編者による「はじめに」によると離島に吹

くあたらしい風とは観光（ツーリズム）の変化に関するものが一つ、従来の就業とは異なる異業種への挑戦が一つ、人口減や高齢化が進む中で人口が増える島の存在が一つ、の合計三つが示されている。しかし、後者の二つは6章と7章でそれぞれ取り上げられるのみで、1～5章ではすべて観光が取り上げられている。取り上げられている7島のうち、長崎県と沖縄県で5島を占めるという事例地域の偏り以上に、テーマの偏りに少しとまどった。その意味では、離島に吹くあたらしい風というよりも、離島観光に吹くあたらしい風という方が、しっくりくるような気もする。逆に、今の離島の多くが観光に活路を求めている、求めざるをえないということなのかもしれない。しかし、あえて三つの「風」を提示するのであれば、むしろ観光以外の側面にも通じる新しい動きや切り口、それに対する検討をもっと発信、提言してほしい。という観点から、いくつかの章をピックアップして紹介したい。

まず、1章では対馬を例に急増する韓国人旅行者とそれを取りまく旅館をはじめとした地元の観光業者の動向が示される。従来の水産業や鉱業、建設業などの既存産業がふるわない中で、2000年以降韓国からの旅行者が大きな増加をみせ、観光業は新たな島の産業として注目を集めた。しかし、宿泊施設の大小や地域によって、受入に対する温度差も顕在化しており、その要因として習慣や文化の違いが指摘されている。加えて、領土問題などの国家間の問題が、対馬の固有の問題にすり替えられることで外国人旅行者に対する島民感情が悪化、さらには習慣や文化の差異さえもが悪意的に解釈されることへの危険性も指摘されている。ここには単に対馬だけの問題ではなく、広く日本における外国人観光客や労働者の受入にも通じる課題を見て取ることができる。

2章では五島列島、特に産業基盤が脆弱な上五島地域を例に、世界遺産の暫定リスト入りを契機に注目を集める、キリシタン・ツーリズムに焦点があてられる。上五島地域はそもそも山がちな地形であることに加え、捕鯨をはじめかつての水産業も後退傾向にあり、独自の観光資源への期待も高い。特に上五島に集中する教会堂をめぐるツアーは一定の成功を見ているようである。その過程で信徒の教会から、観光資源としての教会へという一つの転換が起こったということができる。本来的に遠方からの参拝客を受け入れる観光地としての性格を有していた伝統

的な社寺仏閣群とは異なるこのような教会、特に隠れキリシタンの教会という特殊性が本章のキーポイントでもある。読者はそれが離島の観光地化ということよりも大きな転換であることに気づいてもらいたい。むしろそこには1章のインバウンドツーリズムとも共通する「他者の受入」というテーマが存在しているのである。

また、5章では西表島を例にエコツーリズム導入の先進地であったことを示した上で、島民のエコツーリズムに対する評価が検討されている。そこで明確になったのは島民が必ずしもエコツーリズムに対してポジティブな評価を下していないということである。さらに、観光業者の中にも、自分たちの活動をエコツーリズムとは見なしてほしくないという業者もあり、著者によれば、島の自然を守り、本物の自然や文化や伝統を観光客に見せたいと願う彼らの行動が、本来のエコツーリズムの理念を実践しているという。そこには、はやりのブランドイメージに群がる三流業者とそれによるイメージの低下、およびそれに対する正統性の主張といった構図が存在し、さらにそれを島民が遠巻きに眺める構図もうかがえる。私たちのよく見聞きする観光業者や、あるいはマスコミの流す情報は島民のこうした視線とは乖離した部分でしかなかったのである。そろそろ私たちはそのことに気が付かないといけない。

確かに以上のような動きは、離島観光を取り上げたものではあるが、そこには観光のみにとどまらない離島に吹くあたらしい風を見て取ることができる。それは同時に私たち離島を見るものの視点に吹くあたらしい風でもあり、従来の隔絶性や本土との差異を過度に強調してきたステレオタイプともいえる離島に対する視点からの軽やかな脱却ともいえる。

その一方で、あたらしい風を十分にはらめているのかというケースも見取れる。たとえば、3章では新潟県粟島を例に、県の地域振興局のもとでグリーンツーリズムによる観光を目指して苦闘する島の姿が描かれる。渡島から、島の食、さらに島内散策などへと観光の企画が立てられてはいくのであるが、はたして明るい未来はそこにあるのであろうか。むろん、指摘されるように県と住民の間の意識のズレの解消は必要であろうが、それ以上にはたしてこの施策が観光客にとって、それほど魅力的なものなのであろうか。本章を読む限り、県の施策は瀬戸内をはじめとする西日本の島嶼部にあっては、特に目

新しい施策とも思えない。その一方、同書によれば1964年の新潟地震で島は大きな被害を受け、土地の隆起による新たな平地の拡大、漁港機能の長期停滞、水不足による水田耕作の停止などが生じたという。金太郎飴のような観光施策よりも、地震被害とそれを克服してきた島の取組みをこそこの島の資源とするのではと考えた。

また、4章では長崎県壱岐と青島を例に漁村滞在型余暇活動（ブルー・ツーリズム）が定着するための課題が提起される。第1は住民意識、第2はメニューの拡充、第3は民泊の拡充ということである。一般論としてはその通りであろうが、本章で特徴的なのは修学旅行がその中心を担っていることである。ブルーツーリズムであろうと、グリーンツーリズムであろうと滞在型の離島観光における修学旅行活用の可能性こそが本章の眼目ではなかったか。

総じて、あたらしい風とは単に観光という事象のみに限定されるものではないというのが評者の通底する感想である。また、一つの島、本書に取り上げられた島だけに吹く風でもない。その風は多くの離島にも吹いている風であり、日本という少し大きな離島にも吹いている風である。ただ、それを一般化するためにはもう一工夫が必要だと考える。たとえば、大きな島と小さな島、人口の多い島と少ない島、本土に近い島と遠い島などの座標軸による地ならしが必要であろう。次に期待したい。

最後にもう一点、近頃よくナンバーワンにならなくても良いからオンリーワンになれ、という言い方を耳にするが、はたしてそうだろうか。これは離島観光や離島開発に限ったことではなく、多くの観光地や地域開発についてもいえることだが、ナンバーワンでもオンリーワンでもないが、どうやって活路を見出していくのか、ということが求められているのではないか。そこに吹いているあたらしい風を私たちはもっと受け止めていかないといけないのかもしれない。

（荒木一視）

内田和子：ため池——その多面的機能と活用——。
農林統計協会，2008年，171 p.，2,200円。

1996年から各県で開催されてきた「ため池フォーラム」は今年で15回（愛知県開催予定）を数え、人文・社会科学振興プロジェクトでは「国際ため池シ

ンポジウム」が2006年から2008年にかけて開催された。さらに今春、農林水産省は「ため池百選」を選定し公表している。近年、溜池に関する社会的関心は少しずつではあるが高まっている。

溜池は、日本の地理学において早くから注目された研究対象である。本誌に限ってみても、創刊もない第4巻ですでに大阪府下の灌漑についての検討で溜池が取り上げられ（山極 1928）、また戦前には溜池の分布に関する一連の論文（竹内 1939）が掲載された。戦後も各地の溜池灌漑に注目した論文（たとえば稲見 1955；堀内 1957）や溜池の潰廃に注目した論文（福田 1973）が掲載されている。そして1995年の阪神・淡路大震災に関連しても、本書の著者である内田（1996）の報告などがある。

その報告を含んだ『日本のため池——防災と環境保全——』（内田 2003、以下『日本のため池』）は、2005年に日本地理学会賞（優秀賞）を受賞している。さらに同書は、農薬土木学会賞（著作賞）を受賞するなど、他分野においても高く評価されている。『日本のため池』が溜池の防災面とその維持・管理の現状に焦点が向けられていたのに対して、本書は親水機能など溜池の多面的機能の活用に力点が置かれている。

本書においても、筆者の課題に取り組む姿勢は一貫している。それは、地理学（応用地理学）を専門とする研究者としての立場である。運動家や推進者の立場とは一線を画し、あくまでも溜池関連事業の実現条件の検討を目的としている。とはいえ、現実の社会問題から目を背けるというのではなく、研究結果を踏まえて、結論では方策に関わる具体的な提言を行っている。研究方法は、水利組合や行政など溜池に関わる人々の組織間の利害調整、役割分担、費用負担等の問題をトータルに検討することとし、そのための基本的枠組（農業者（水利団体）・自治体・地域住民の関連の説明モデル（図序-1））が最初に提示されている。そして、事業が成功した事例を詳細に分析し、そこから実現条件を抽出するという手法を採っている。

本書は、プロローグと八つの章（事例研究）、そしてエピローグで構成されている。それぞれの概要を以下に示す。

プロローグでは、農業の多面的機能の説明ならびに本書の目的と基本概念である溜池の多面的機能についての整理がなされている。溜池の多面的機能に